

## 韓国の言論学研究の動向：2017年度

小林 聡明\*

### はじめに

本稿は、2017年2月から2017年12月までの韓国の言論学（メディア、ジャーナリズム、コミュニケーション領域）研究の動向について素描するものである。ここで取り上げるのは、韓国の言論学研究領域で刊行されている主要三誌、すなわち『韓国言論学報』（韓国言論学会）、『韓国言論情報学報』（韓国言論情報学会）、『言論と社会』（社団法人 言論と社会）に掲載された論文である。本稿では、これらの論文について、タイトルとともに簡単な内容を紹介する。それに先だって、韓国の言論学研究の成果について、いくつかの特徴を指摘しておきたい。

第一に、時代状況にあわせたタイムリーな課題を設定し、分析を試みていることである。セウォル号沈没事故や若年層の雇用問題といった社会的な事象や朴槿恵大統領の弾劾をめぐる政治的な 이슈のほか、人工知能に関する現在進行形の課題も研究の対象とされている。こうした研究には、現在の問題に、どのように向き合い、いかに乗り越えていくのか、そして、よりよい未来をつくるためには、何をどのようにしたらいいのか、その処方箋を提示する目的も込められている。それは意欲的で、きわめて重要な意義を持つものである。だが、単なる現状分析でおわりかねない危うさもあわせ持つ。タイムリーな課題に取り組む研究が、どのように射程を広げ、いかなる社会的かつ学術的な意味を紡ぎ出していくのか。この点が、さらに深められるべき論点として浮き彫りになってくるだろう。

第二に、研究課題が、あくまで韓国関連に留まっており、他国のメディア、ジャーナリズムに着目した研究が、きわめて少ない点である。こうしたことが、短期間で成果を求める韓国のアカデミズムの状況と、どのように関連しているのか、興味は尽きない。

第三に、方法論的な特徴である。韓国の研究動向を見ると、質的・量的調査に基づいた影響を測定しようとする研究が多く見られる。一方、歴史的なアプローチを用いた研究には、数本の論文がみられる程度である。とりわけ前者の方法論にはフレーム分析が多く見られるのも、一つの特徴として指摘できる。後者の研究は、ほとんどがソウル大学関係者による成果である点も注目したい。極言すれば、歴史的なアプローチによる研究は、もはやソウル大学以外では、関心が払われなくなっているのかもしれない。

第四に、ソーシャルメディアに関する研究が、今年も多くみられたことである。だが、明らかにすべき課題の設定がやや単調になってきている点が気になる。

第五に、論文執筆者に修士課程や学部生の名前が見られるようになってきていることである。これは数年前には考えられなかった状況である。近年、韓国の大学は、大幅に世界ランキングを上昇させている。学部や大学院教育の実績は、こうしたランキングの上昇において、重要なポイントに

---

\* こばやし そうめい 日本大学法学部新聞学科 准教授

なっているとの指摘もある。論文執筆者の属性変化は、大学の外部評価や世界ランキングと繋がっている可能性がある。こうした変化の様相も、韓国の言論学研究の動向が示す一つの特徴であろう。

以上、韓国の言論学研究の動向が有する、いくつかの特徴を示したうえで、次に個別の研究成果について見ていきたい。

## 1. 『韓国言論学報』

### (1) 第61巻1号 2017年2月

#### ① ジャーナリズム・コミュニケーション

「メイン・ニュースの論調差別化が示した韓国総合編成ジャーナリズムの地平：無償福祉問題を中心に」(ユ・スジョン・李ゴンホ)は、4つの総合編成チャンネル・ニュースにおける論調の違いを浮き彫りにするために、総合編成チャンネルが開始された2012年から2015年までの無償福祉報道を中心に分析を試みた。「経済コミュニケーション効果理論についての実証的分析：韓国経済の時系列変数間の位階、方向、強度、持続性の検定」(李ワンス、沈ジェ Chol)は、韓国の経済ニュース、客観的な経済の現実、主観的な経済の現実認識、そして、大統領の経済支持度を含む4つの経済コミュニケーション変数間における相互効果の位階、方向、強度、そして持続性を政府別、景気局面別の時期に区分して分析し、経済コミュニケーション理論を統合的に検証した。「インターネット討論空間の政治コミュニケーション・メカニズム：統合的複合性、情緒的表現、そして公衆の支持」(崔スジン)は、インターネットの討論空間で共有された実際の対話内容に基づいて、いかに認知的・情緒的特徴をおびた文章が、当該空間で公衆の支持を獲得するのかについて考察した。

#### ② ニューメディア

「知覚した自己統制力およびインターネットゲーム中毒の多元的要因間の因果性の検証についての研究」(チョ・ミンギョ、リュ・ソンジン)は、自己統制力の尺度とインターネットゲーム中毒の診断尺度および要因分析を通じて、インターネットゲーム中毒に影響をあたえる自己統制力の効果について明らかにした。

#### ③ 放送・コンテンツ・文化

「現実と幻想を横断するコンテンツの再媒介化：〈ミセン—未生—〉の再媒介化を中心に」(金ウンヨン)は、テレビドラマ〈ミセン—未生—〉を事例として、再媒介の二重論理が慣習を通じて現実感と幻想性を具現する方式について分析した。「テレビ視聴慣習の時間的変化：同時化概念を中心に」(李ソウン)は、テレビ視聴の変化を時間的レベルで分析し、その意味について解明した。

#### ④ PR・広告

「恐怖と社会規範が未婚女性の産婦人科訪問の意図に及ぼす影響：拡張された計画行動理論と対人コミュニケーションの適用」(ミン・ジウォン、車ヒウォン)は、韓国社会における未婚女性の産婦人科訪問に影響を与える要因について明らかにした。

## (2) 第61巻2号 2017年4月

## ① ジャーナリズム・コミュニケーション

「憲法裁判とニュース・フレーミング：統合進歩党解散決定前後の報道フレームの差異を中心に」(ユ・ヨンミン)は、韓国言論が、憲法裁判事件を意味化することで、どのように特定のナラティブ枠組を再構成するののかについて分析した。「検閲の‘痕跡消去’を通じて見た1930年代の植民地新聞検閲の作動様相」(李ミンジュ)は、日本植民地期における朝鮮語新聞への検閲の痕跡に焦点をあて、検閲の様相と植民地検閲権力の変化を解明した。「たばこ規制政策報道に表れた記事類型、主題、論調分析：2011～2016年の禁煙区域、たばこ価格、警告図、禁煙支援政策の記事を中心に」(崔ユジン)は、保健福祉部のたばこ規制政策が強化された2011年から、警告図施行令が承認された後の2016年6月1日までの韓国紙5紙と地上波放送局3社のたばこ規制政策に関する記事について分析した。

## ② ニューメディア

「コンピュータ・エージェントと関係を結ぶ：共感を表現するコンピュータ・エージェントを通じた同類意識形成と社会的支持の獲得」(ユ・ミンジン、チンジョン・ウンヨン、金ジョンヒョン)は、コンピュータの共感表現が、同類意識や好感度、社会的支持に対して、どのように肯定的な効果を発揮するののかについて解明した。

## ③ 放送・コンテンツ・文化

「インターネット個人放送BJの労働過程についての探索：アフリカTVの事例を中心に」(李ドンフ、李ソルヒ)は、インターネット個人放送のBJを対象として、利用者コンテンツ制作の労働過程と、それにともなう価値の生産過程について分析した。「テレビ視聴慣習の空間的変化：家内化概念を中心に」(李ソウン)は、テレビ視聴の変化について、テレビが「家内化」の媒体となったことに注目し、空間的レベルから検討した。「放送映像コンテンツ情報利用行為の媒介効果分析：情報探索方式と利用情報類型を中心に」(チョ・ウンヨン)は、マルチ・プラットフォーム環境において、放送映像コンテンツの情報利用行為が、放送映像コンテンツを消費する過程において、どのような役割を有しているののかについて分析した。

## ④ PR・広告

「イシューの正当性と心理的距離感に対立するイシュー関連政策の支持に与える効果研究」(朴ジョンソン、朴ヒョンスン)は、イシューの正当性という「価値」について下位レベルの解釈を引き起こす実用的な正当性と上位レベルの解釈を引き起こす道徳的正当性で区分し、公衆の行動意図についての心理的距離の影響力が、価値別に、どのように異なっているのかを分析した。「国際救護キャンペーンの伝達における補償類型と利他的性向(共感的関心)が満足感、抵抗、態度に及ぼす影響」(李スンジョ)は、国際救護キャンペーンで具現化される補償類型の影響と共感的な関心性向の調節作用について分析した。

## (3) 第61巻3号 2017年6月

## ① ジャーナリズム・コミュニケーション

「韓国『Pollinist』の特性と変化：言論人出身国会議員を中心に」（金セウン）は、韓国ジャーナリズムの特徴の一つを言論人の政界進出と規定し、言論と政治の独特な接合としての「ポリナリスト」が有する特徴的な姿を示した。「韓国公営放送の言論人の職業アイデンティティに関する研究：KBS 言論人の『機能職業人』的属性を中心に」（金スヨン）は、KBSの現職ジャーナリストへの深層インタビューを通じて、その職業アイデンティティを明らかにした。「マイノリティ運動としての記者団教育の成果と代案的方向の模索：移住民の声という観点を中心に」（チョン・ウィチョル）は、記者団教育を修了した移住民と先住民およびMWTV（Migrant World TV）関係者への聞き取りを実施し、さらに参与観察や対話を行うことで、記者団教育が、どのような成果をもたらし、いかなる方案がありうるのかについて検討した。

## ② ニューメディア

「ネットワークとインターネット・リテラシーが青少年のオンライン参与行動に及ぼす影響」（金ウンミ、ヤン・ソウン）は、青少年と成人の比較分析を通じて、オンライン参与を行う青少年を理解する目的から、個人の親社会的態度、オンライン・ネットワーク、インターネット・リテラシーの程度によって、娯楽コンテンツ生産、利他的コンテンツ生産、政治コンテンツ生産に、どのように参与していたのかを分析した。

## ③ 放送・コンテンツ・文化

「メディアが標榜する高齢化社会の望ましい老人像：歓迎される市民としての老年を送る使命」（金ウンジュン）は、韓国社会が高齢化時代の高齢者を、どのような存在として再形成しているのかに着目し、高齢化時代におけるメディアの高齢者言説を解明した。

## ④ PR・広告

「コーポレート・アソシエーションにともなうリスク類型、対応戦略、リスク履歴が公衆の危機コミュニケーションおよび企業の正当性認識に及ぼす影響」（崔ウンジョン、金スヨン）は、コーポレート・アソシエーションにともなう危機の類型、危機コミュニケーション戦略（弁明/謝罪）、危機履歴の有無などによって、公衆の危機コミュニケーション認識および企業の正当性認識に、どのような影響を及ぼすのかについて分析した。「公衆状況理論を基盤としたPR政策研究：PM2.5問題を中心に」（韓ヒョク、金ヨンウク、クム・ヒョンソプ）は、PM2.5問題について技術以外の解決案として、PRを通じた対応案を講究した。

## ⑤ 理論・方法

「危険な不確実性の時代、ゴミとなる生：ベックのバウマンを經由し、「今、ここ」の主体をふり返る」（リュ・ウンジェ）は、ベックとバウマンの現代社会とモダニティについての診断と解釈、彼らの一連の著作を貫く主題と理論を紹介し、「今、ここ」における主体の生と実践、戦略と代案的展望を示した。「PR構成体系研究：OSPCモデル（Organization-Situation-Public-Communication

Model) 提案」(朴ノイル、呉ヒョンジョン、チョン・ジヨン)は、PR学を一つの学問的構成体系に分類し、発展させるための試みとして、体系的な理論に基盤をおいた概念的モデルを導出した。

#### (4) 第61巻4号 2017年8月

##### ① ジャーナリズム・コミュニケーション

「精神疾患のスティグマと帰因についての言論報道分析」(白ヘジン、チョ・ヘジン、金ジョンヒョン)は、主要言論が、精神疾患について、現実を、どの程度反映し報じたのか、そして精神疾患の責任(帰因)とスティグマを、いかに報道したのかについて分析した。「政治の司法化時代における司法ジャーナリズムの考察：民主的法治国家要請と司法の熟議としての司法ジャーナリズム批判」(ユ・ヨンミン)は、韓国言論における司法ジャーナリズムの制約について、司法をめぐる公的な熟議の民主的価値の文脈から批判的に考察した。「ポータル・ニュース・サービスとニュース流通の変化：2000-2017年のネイバー・ニュースのビックデータ分析」(ソン・ヘヨプ、ヤン・ジェフン)は、2000年4月から2017年2月までにネイバー・ニュースの流通について、経済紙中心のニュース供給、スポーツ紙独占によるスポーツ芸能メディアの多辺化、通信社ニュースの流通、スポーツ芸能記事の爆発的増加とニュース提携評価委員会という側面から分析を試みた。

##### ② ニューメディア

「AIロボットの擬人化研究：‘AlphaGo’報道の意味ネットワーク分析」(イム・ジョンズ、シン・ミンジュ、ムン・フンボク他)は、AlphaGoと韓国人囲碁棋士との対局に関する報道が、AlphaGoを、どのように擬人化したのかについて分析した。

##### ③ 放送・コンテンツ・文化

なし

##### ④ PR・広告

「たばこ価格警告図の類型と先行要因による説得効果：利益フレームと損失フレーム間の比較分析を中心に」(金ヘヨン、ムン・ミリ)は、行動の利益を強調する肯定的なメッセージと現在の行動の損失を強調する脅威のメッセージの効果について比較分析を行った。

#### (5) 第61巻5号 2017年10月

##### ① ジャーナリズム・コミュニケーション

「地域災害ニュースにあらわれた報道慣行と対案：セウォル号ニュースの生産過程における記者の葛藤構造を中心に」(金キョンヒ)は、地域災害事故の報道過程であらわれた慣行について、記事分析を通じて、明らかにした。「災害問題で敵対的メディア知覚の発生に影響を及ぼす要因研究：問題関与概念の理論的妥当性の検証を中心に」(金ナムドゥ、黄ヨンソク)は、2014年の地方選挙直前に実施されたオンライン調査資料を用いて、セウォル号災害報道を通じた「大統領関連の敵対的メディア知覚」の発生について分析し、問題への関与が、大統領の災害責任の可否に関する意見とや敵対的メディア知覚と、どのような関係していたのかについて明らかにした。「政治性向、

ニュースメディア利用、政治対話が政治参与の態度と行為に及ぼす影響：朴槿恵大統領弾劾の局面を中心に」(金スジョン、チョン・ヨング)は、朴槿恵前大統領についての憲法裁判所の弾劾審判決定の直前におこなわれた設問調査を分析し、ソウル市民の政治性向やニュースメディアの利用、政治対話が、どのように政治参与に影響したのかについて解明した。「解職以後、朴クォンサンの言論活動と言論思想」(金ヨンヒ)は、1952年に合同通信の記者としてスタートし、解職まで50年以上のあいだ、言論活動を行ってきた朴クォンサンの解職以後の活動について、彼の言論認識と思想に焦点をあてて考察した。「原子力記事のフレーミングが受容者の心理的抵抗に及ぼす影響：心理的抵抗理論を中心に」(金ヒョジョン)は、心理的抵抗理論に基づいて、原子力エネルギー関連の記事に接する個人の感情的、認知的反応について分析した。「‘金英蘭法’施行が韓国言論倫理に及ぼした影響についての探索的研究：言論人の法認識および法施行以後、報道原則遵守の変化を中心に」(朴キヒョ、ホン・ソンウォン、シン・テボム)は、金英蘭法施行以後、記者を対象とした設問調査を通じて、言論人の金英蘭法についての認識を明らかにし、金英蘭法が言論人の倫理意識を高めるきっかけとして作用しているのかについて検討した。「知識習得なのか、政派的解釈なのか：政派的メディア利用が政派的イシューについての態度極化に及ぼす影響」(李ナヨン、チョ・ユンジョン)は、個人の政派的メディア利用が、特定イシューへの態度極化をもたらす過程に着目し、知識と解釈の役割を分析した。「テレビニュースの匿名取材源報道についての放送記者の認識研究：取材源表記および編集方式、動機、効果を中心に」(李ユンヒ、チョ・ヨンハ)は、放送ニュースにおける匿名取材源報道の特性および問題点を把握し、改善方案を導き出す目的から、匿名取材源使用の表記および編集方式と動機、それによる効果に対する記者認識を分析した。「政治関連の否定的情緒についての尺度開発と妥当化研究」(チョ・ウンヒ)は、政治関連の否定的情緒を検討し、政治嫌悪概念を捉え直し、総合的な否定的尺度を開発することで、尺度の妥当化を試みた。

## ② ニューメディア

「結婚移住女性の社会的スティグマ克服：ソーシャルメディアを通じた関係的コミュニケーション効果」(安スンテ、李ハナ)は、結婚移住女性が知覚する社会的スティグマを克服するために、ソーシャルメディアを活用した関係的コミュニケーション効果について分析した。

## ③ 放送・コンテンツ・文化

「Netflix 利用者の持続的利用意図の決定要因に関する研究：韓国と台湾の利用者についての国家間比較研究」(オ・イジュエン、チョ・ジェヒ)は、韓国と台湾の利用者のNetflixサービスへの態度とサービスを持続的に利用する意図に対して、何が、どのように影響を与えているのか、その諸要因について考察した。

## ④ PR・広告

「自我調節レベルが寄付意図に与える影響：社会的規範の端緒を活用した説得メッセージの調節効果を中心に」(金リュウオン、チョン・セフン)は、寄付行動を決定する重要な要因としての衝動を克服し、望ましい行動をする心理的過程としての自我調節に注目し、自我調節資源の枯渇が、

寄付の意図に及ぼす効果と、寄付意図を形成させる方案としての社会的規範メッセージの調節効果について分析した。「認識可能な受益者効果と寄付意図：空間的距離感と広告懐疑主義の調節効果を中心に」(ナム・キョンテ)は、認識可能な被害者効果が、寄付意図に及ぼす影響を空間的距離感と広告懐疑主義によって調節されるかについて検討した。「パブリック・コミュニケーションとしての政府広告分析研究：盧武鉉、李明博、朴槿恵政府のテレビ広告を中心に」(ペ・ジョングン、チョ・サムソプ)は、盧武鉉、李明博、朴槿恵政権で行われたテレビ広告を分析し、政府広告の性格と類型、コミュニケーション目標および方式などについて分析した。「政府の多文化政策PRについての公衆の認識に影響を与える要因：コンティンジェンシー受容理論を中心に」(黄ソンウク)は、政府の多文化政策PRへのソウル市民の認識を調査し、その認識に影響を与える諸要因について解明した。

### ⑤ 理論・方法

「道徳基盤が政治理念、政治的意見表明、寛容に及ぼす影響」(リュ・ウォンシク、李ジュンウン)は、ジョナサン・ハイトが示した5つの道徳基盤について、韓国人を対象とした調査研究から、その要因構造を確認しようとした。「新聞紙上における競争、財政投入、そして多角化」(オ・ジョンホ)は、韓国の全国総合紙と経済紙の多角化現況を検討し、財政投入の決定要因を分析した。

## (6) 第61巻6号 2017年12月

### ① ジャーナリズム・コミュニケーション

「競争的政治と恩顧主義が公営放送の政治的独立性に及ぼす影響」(金サンユ、李ジュンウン)は、民主的権力の交替可能性が高い国家では公営放送の実質的独立性が高く表れ、恩顧主義が強力な国家では実質的な独立性が弱いという指摘について検討した。「韓国現代史なかの中国同胞：1993年以後<朝鮮日報>と<ハンギョレ新聞>社説/コラムに表れた‘民族言説’の変化」(シン・イェウォン、マ・ドンフン)は、韓国言論に表れた中国同胞についての民族言説の意味化過程を分析した。「文人記者・朴ピルヤンの生涯と言論活動：<東亜日報>から<労働新聞>へ」(朴ヨンギョ)は、植民地朝鮮と満州、北朝鮮で活動した新聞記者・朴ピルヤンが、どのような言論活動を行い、いかなる理想をもっていたのかについて考察した。「ファクトチェック・ニュース露出、影響力認識、共有行動についての探索的研究」(白ヨンミン、金ソンホ)は、19代大統領選挙期間のファクトチェックの記事に接した有権者が、いかなる特性を有していたのかについて分析し、自らへのファクトチェック・ニュースの影響力認識と他の有権者に対する認識を比較した。「1960年代朴正熙政府の公報宣伝政策の政治的性格」(尹サンギル)は、1960年代の朴正熙政権が推進した公報宣伝政策について検討した。「例示写真と集団主義の性向が多文化受容に与える影響：リスク認識の媒介的役割を中心に」(李ミンヨン)は、移住民労働者の犯罪に関する記事が、韓国人のリスク認識と多文化受容に、いかなる影響を与えたのかについて考察した。

### ② ニューメディア

なし

③ 放送・コンテンツ・文化  
なし

④ PR・広告

「地上波チャンネル・ブランドの真正性の知覚が地上波チャンネル・ブランドの忠誠度に及ぼす影響」(金ウァンソク)は、地上波チャンネル・ブランドの真正性を知覚する先行変数と結果変数を提示し、その関係を検証した。

⑤ 理論・方法

「フェミニズム読書討論会員のジェンダー不平等経験と対処戦略についてのグラウンデッド・セオリー研究：ドゥルーズとガタリの欲望と少数者の思惟を中心に」(金ヘヨン、カン・ジンスク)は、フェミニズム読者討論の経験のある会員が、どのようにジェンダー不平等に対処する戦略を実現するのかを分析することで、ジェンダー不平等の問題を解決しうる対案の方案を模索した。「地球温暖化問題でのスティグマに及ぼす影響変数についての研究：‘感情基盤スティグマ・モデル’の適用と確定」(朴ヘヨン、金ヨンウク)は、「否定的感情」を強調したスティグマ・モデルを適用し、地球温暖化予防の意図に影響をあたえる、いくつかの心理的要因の関係について、構造的モデルを通じて検証した。「韓流研究の知識ネットワーク分析」(ホン・ソクギョン、朴テミン、朴ソジョン)は、韓国で2001年から2016年までに出版された韓流関連の学術論文について分析し、知識ネットワークを描いた。

## 2. 『韓国言論情報学報』

(1) 第81号 2017年2月

① 企画論文：言論—メディア運動の省察と新たな模索のために

「共同体メディアの言説のトレンドと研究傾向：学術論文の主題、方法についてのメタ分析を中心に」(カン・ジンスク)は、学術的な言説のなかで、どのように、オンライン・コミュニティの利用者が経験するような参与民主主義があらわれ、それが日常の生の政治を生み出す新たな主体になっているのかについて分析した。「共同体は発明されなければならない：ソウル市マウル(コミュニティ)メディア形成と活動を中心に」(金イエラン、金ヨンチャン、チェ・ヨンギル、白ヨンミン、金ユジョン)は、共同体の形成過程、構造と特質、そして、その内在的意味を解明した。「マウル(コミュニティ)メディアの実践についての探索的研究：ソウル・マウルメディア活動についてのグラウンデッド・セオリーを通じた分析」(李ヒラン、金ヒヨン)は、2012年にソウル市の支援政策とともに登場した共同体メディアとしてのマウル・メディアに着目し、その活動の実践過程について検討した。「韓国市民言論運動の特性と展望：李明博・朴槿恵政権時期を中心に」(チョン・ヨンウ)は、李明博・朴槿恵政権期における市民言論運動の抵抗と闘争の様相を浮き彫りにした。「マウル(コミュニティ)共同体メディア生産者のメディア経験に関する探索的研究：済州地域共同体メディアの生産と課題、政策的含意を中心に」(チョン・ヨンボク)は、済州地域のマウル共同体メディアへの参加者が生産過程で経験する価値に着目し、マウル共同体メディアの特性を把握した。



## ② 一般論文

「MBC『白ジョンムン録音記録』事件で見た公営放送の危機：政治権力の言論統制メカニズムを中心に」(金サンギョン)は、言論の自由と民主主義への重大な挑戦として位置づけられる「白ジョンムン録音記録事件」について、これまでジャーナリズムや国会などにおいて事実把握や真相究明がなされてこなかった原因が、何だったのかについて、メディア・ジャーナリズム関係者のインタビューを通じて解明した。「KBSの公報放送のモデル的性格に関する研究：不動産ニュース生産過程を中心に」(金スヨン、朴スングァン)は、KBSのメディア・ジャーナリズム的な性格をとらえるために、不動産ニュースが生産される過程について分析した。「K-POPの韓国ファンダムについての研究：海外ファンについての認識を中心に」(ベルベギエ・マティユ、チョ・ヨンハン)は、韓流が世界的に広がるなかで、韓国のファンダムの海外ファンへの認識について分析した。「ソーシャルメディアにおけるニュース情報受容と伝統メディアニュース解読の比較：カカオ・トークの対話と新聞比較を中心に」(李ミナ、ヤン・スンチャン、ソ・ヒジョン)は、ソーシャルメディアでのニュース情報受容について、既存の伝統的な新聞記事形式のニュース閲読と比較分析した。「『不穏通信』の系譜と『ツイッター』：朴ジョングン事件についての言説分析を中心に」(ホン・ナムヒ)は、北朝鮮関連の掲示版への書き込みや北朝鮮のツイッターをリツイートするなどの行為で「国家保安法」違反容疑で拘束・起訴された朴ジョングン事件に焦点をあて、ツイッターの媒介的特性を解明し、従北言説と政府への批判的な活動、社会参与活動などとの連関性のなかで、朴ジョングンが、どのように「不穏な存在」として規定されたのかについて明らかにした。

### (2) 第82号 2017年4月

「『保守・進歩フレーム』の限界とメディア批評の課題」(孫ソクチュン)は、民主主義の危機とジャーナリズムの相関性を分析し、メディア批評が、「民主主義の維持と成熟」を牽引する学術運動として新しく位置づけなければならないことを指摘した。「言論の『大学改革』言説についての批判的研究：李明博政権以後の大学政策についての主要新聞の報道を中心に」(李オヒョン)は、言論が政権主導の「大学改革」政策を、どのように報道したのかを明らかにした。「メイカー文化を取り巻く言説的地平：メイカームーブメント (maker movement) についての批判的言説分析」(崔ヒョクギユ)は、メイカームーブメントに関連した単行本、政策報告書、記事およびコラムなどを批判的言説分析の観点から検討し、メイカー文化を取り巻いた言説的地平と社会的実践を分析した。

### (3) 第83号 2017年6月

「セウォル号沈没事件のメディア言説分析：批判的言説分析 (CDA) とビッグデータ言語ネットワーク分析の結合」(金ヨンオク、咸スングィョン、金ヨンジ)は、セウォル号沈没事件に関するメディア報道を批判的言説分析の枠組で分析した。「地下鉄空間の女性経験、近代化への一つの疑心」(パン・ヒギョン、リュ・ジヒョン)は、ソウルの地下鉄空間を経験した韓国国籍で20代から40代のソウル在住女性のオートエスノグラフィーを通じて、当該空間が、女性にいかなる「場所」として認識させたのかを明らかにした。「SNS利用が相対的な剥奪感と客観的、主観的経済地位間の格差を経て、生の満足度に及ぼす影響」(ソ・ミエ)は、SNS利用者を対象に実施したオンライン

調査資料を用いて、SNS利用が、相対的な剥奪感、経済的地位認識、生活の満足に、いかなる影響を与えたのかについて分析した。「受容者の言論人、新聞ニュース問題、新聞ニュースの信頼度評価が新聞ニュース利用量に及ぼす影響についての縦断的研究」(呉デヨン)は、受容者の言論人评价や新聞ニュースの問題認識、新聞ニュースの信頼度変化の推移を明らかにし、それらを媒介にして、新聞ニュース利用者に、どのような影響が及んでいるのかを解明した。「紙の新聞の閲読時間変化の推移一年齢、コーホートおよび時期効果(2002年~2014年)」(李ガンヒョン、南ジェイル)は、新聞利用の減少の原因について、ライフサイクルにともなう年齢効果、メディア環境変化によって主導された時期効果、特定のメディア経験を共有するコーホート(または世代)効果に着目して解明した。「同時代青年のアルバイト労働テクノ・メディア的再構成」(李グァンソク)は、韓国社会における非正規職青年労働者とデジタル・メディア技術が、アルバイト労働の現場で結合する方式について分析した。「ジェンダー化された暴力についてのニュース報道:マスコミ4社(朝鮮日報、東亜日報、ハンギョレ、京郷新聞)の江南駅女性殺人事件報道を中心に」(ホン・ジア)は、2016年5月の江南駅女性殺人事件についての朝鮮日報、東亜日報、ハンギョレ、京郷新聞の記事内容を分析し、言論が、どのようにジェンダー化された暴力を社会的議題として設定し、いかに問題の原因と対策を示したのかについて分析した。

#### (4) 第84号 2017年8月

「ケーブル地域チャンネルは放送の地域性強化の代案となるか:地域地上波とケーブル地域チャンネル間をつなぐ可能性の探索」(金ジェヨン)は、地域地上波とケーブル地域チャンネルのシナジーを通じた放送地域性を極大化させる可能性を模索した。「不安定な現実と対面する、この時代の青年たちの生に関する質的分析:‘三抛世代’、そして‘ヘル朝鮮’という呼名についての青年主体の体化された対応と観点を中心に」(孫ドンウク、李ギヒョン)は、「ヘル朝鮮」に象徴される韓国社会において、多数の青年主体が直面している社会経済的な不安と過度な競争の集合的な効果について質的分析と批判的な文化解読の方法で解明した。「存在するが存在しない他者の空間:映画<バックス・レディ>の言説空間を中心に」(チャン・ウンミ、韓ヒジョン)は、女性主義の視点から映画<バックス・レディ>が構成する空間について、ヘテロトピアの概念で分析した。「デジタル写真以後の写真家の変化:現像学的接近を中心に」(チョ・インウォン)は、フィルム写真からデジタル写真への変化の過程で、職業写真は、どのような経験をし、いかなる認識を有していたのかに着目し、現象学的なアプローチによって、彼らの労働と創作環境の変化によって紡ぎ出された意味と文脈を検討した。「サードの噂(THAAD rumor)報道にあらわれた韓国言論の政党性:ネットワーク分析とフレーム分析を中心に」(ホン・ジュヒョン、孫ヨンジュン)は、うわさの社会的拡散過程で、韓国言論が、どのような役割をしたのか、ネットワーク分析とフレーム分析を通じて明らかにした。

#### (5) 第85号 2017年10月

「朝鮮時代の民間印刷・朝報の言論史的意義」(金ヨンジュ・李ボムス)は、民間印刷・朝報に関連した文献内容を整理し、発掘された民間印刷・朝報の体制と内容、言論学的意義などを考察した。「老人のテレビ視聴の動機がジャンル視聴、視聴総量および満足度と与える影響」(李ガンヒョ

ン、シン・ドンフ)は、高齢化社会にいたる韓国の現実において、高齢者の生についての社会的価値の重要性と彼ら・彼女らのテレビ依存性が深まっているという現実認識にもとづき、高齢者の生において、テレビがどのような機能を有しているのか、そして、こうした機能が、テレビジャンル視聴とテレビ視聴総量およびテレビ一般に対する満足度に、いかなる影響を与えるのかについて明らかにした。「新韓流」ドラマ<イケメンですね>の受容および消費方式は、韓流ドラマとどのように関係しているのか：日本のインターネット掲示板分析およびFGIを中心に」(鄭スヨン)は、2009年以後に登場した「新韓流」拡散の主演としてみなされるドラマ<イケメンですね>のインターネット掲示板を分析し、<イケメンですね>の受容と消費方式の特徴を浮き彫りにした。「SKテレコムの子会社CJハロービジョン引受合併事例についての政策執行評価研究」(チョン・インスク)はSKT-CJハロービジョンM&A政策過程が、手続き的合理性を満たしながら、そのまま履行されたものなのかについて評価した。

#### (6) 第86号 2017年12月

「ドラマ制作過程から広がる生産者間の葛藤研究」(金ミスク、洪ジア)は、テレビドラマ制作過程で広がる作家と監督、企画者および制作者、俳優などの生産者間での葛藤状況と、それを解決してドラマがつくりだされる過程について解明した。「人間とデジタル存在の関係：関係の物質性、非所有性、個体超越性」(朴ソンヒ)は、人工知能OSとの愛を扱った映画<彼女>に着目し、デジタル存在を対象化したり、競争相手とみる人間中心主義の実体的な観点をこえ、関係的な観点から人間とデジタル存在の存在様式について検討した。「創意産業体制の文化芸術政策の動学：文化企画者の実践を中心に」(朴チョン、金イェラン、金ウンミ)は、経済発展と社会統合のための突破口として捉えられる創意産業体制での芸術実践と文化芸術制作の接点について考察した。「脱言論」メディアの登場とその様式、そして公共性：アルゴリズム・メディアに関する批判的小考」は、メディア化が引き起こしたメディアの「脱言論化」を検討し、公共性概念の新たな地平について分析した。「笑うことができない青年：コメディ映画で再現された青年労働の現住所」(チョン・ス、チョ・ジンヒ)は、コメディ映画のナラティブを分析し、青年の現実と彼ら・彼女らの労働をめぐる社会の多様な難題に光をあてた。

### 3. 『言論と社会』

#### (1) 第25巻第1号 2017年2月

「グローバル環境でアメリカ居住韓国人の文化アイデンティティが韓国メディアコンテンツの利用に与える影響」(チョン・ジョンウ)は、アメリカに居住する韓国人を対象として、文化アイデンティティによって、韓国メディアコンテンツの消費が、どのように異なるのかについて明らかにした。「韓国のミュージカルマニアの観客活動の文化政治的含意：オンラインコミュニティ活動を中心に」(朴ヘソン)は、ミュージカルマニアの観客が特定のイシューを中心にコミュニケーションをとり、連帯する過程を分析することで、彼ら・彼女らの文化政治的な含意を明らかにした。「1980年代韓国のインターネット技術導入と開放・共有・参与のデジタル文化形成」(チョ・ドンウォン)は、韓国において、開放・共有・参与のデジタル文化が、どのように開始されたのかについて、1980年代のインターネット技術が導入され、利用される過程から検討した。「マウル(コ

コミュニティ) メディアの参与と政治文化に対する批判的検討」(チェ・ヨンギル)は、現在、韓国社会で活発に議論され、実践されているマウル(地域)共同体に焦点をあて、共同体のメディアが、民主主義的共同体構成と運営に対して、どのように寄与しているのか、その前提と条件について検討した。

(2) 第25巻第2号 2017年5月

「ポストヒューマン技術言説とポストヒューマン主体構成の政治性に対する探求：人工知能技術に関する言説分析を中心に」(金スミ)は、ポストヒューマン技術について、韓国の主流言論と放送の言説が、今後、社会が直面する社会的存在条件と、とらなければならない主体性を提示する方式を分析し、その意味化作業の社会政治的含意を明らかにした。「『私の好きなグルメ番組 BJ は……』：グルメ番組視聴経験に対する解釈的研究」(ムン・ヨンウン、沈ジス、朴ドンスク)は、グルメ番組が、若者世代に人気がある理由は何か、そして、それを視聴しようとする原動力がいかなるものかについて、インタビュー調査を通じて解明した。

[Critical Forum]

「むき出しの思惟にさらされた憂鬱な自我—韓ビョンチョルの成果社会に対する科学・医学の修辭学的批判」(ソン・ミンギユ)は、韓ビョンチョルが語る成果主体の憂鬱な自我について、現代資本主義の医学—科学的知識の実践と、いかなる連関性を有しているのかという観点から論じた。

(3) 第25巻第3号 2017年8月

① [企画論文] 民主化30年の韓国言論：批判と省察

「韓国の民主化と言論：1987-2017」(チョ・ハンジェ)は、民主化から30年間の韓国の民主主義と言論・メディアが、いかなる軌跡をたどり、どのような関係を結びながら、現在にいたっているのかについて分析した。「民主化以後の大統領選挙報道の慣行と放送の民主主義機能の退行：政治圏の「疑惑提起」と「暴露」に関する報道分析(1992年-2012年)を中心に」(金チュンシク)は、民主化以後の大統領選挙において、特定の政治勢力が競争関係にある政党や大統領候補を対象に疑惑を提起したり、否定的影響を与えることを期待する事案を暴露したとき、放送が、これをニュースとして、どのように対応したのかについて検討した。「民主化以後の韓国言論の反共言説年代記」(チュ・ジェウオン)は、韓国の主要言論が、どのような反共言説を生産し、それが、いかなるメカニズムによって行われていたのかについて、民主化後の1990年から2016年までの時期にしぼって分析した。「『新』解職言論人の「圧縮的」生涯史を通じてみる韓国政治権力の言論統制：YTNとMBCの事例を中心に」(金セウン)は、1970年代から80年代の維新体制と軍事政権で発生した解職言論人を「新」解職言論人と名づけ、彼らの解職直後の経験と生を中心に「圧縮的」な生涯を追憶することで、保守政権の言論統制の実相を解明した。

(4) 第25巻第4号 2017年11月

「覇権(君主)制社会秩序と政派言論—その現実と起源」(朴スングワン)は、現代韓国の政治と言論が、外観の成果とは異なり、その深層で露呈している不正と失敗の現実について、最近の大統

領選挙の局面に関連づけて検討した。「セウォル号災難事故報道以前に起こった文化心理学的偏向性：《朝鮮日報》と《ハンギョレ》の比較を通じて」（李ワンス、裴ジェヨン）は、セウォル号沈没事故を報道した韓国の日刊紙の写真記者が、どのような東アジア的な思考バイアスを有していたのかについて分析した。

[Critical Forum]

「時代を代表する語り手であり、全方位的に活動した批評家、そして行動する良心であったジョン・バージャーをたたえつつ」（李ギヒョン、朴ジュファ、チョン・ユンジョン、黄ギョンア）は、社会経済的な争点と傷跡の分析、政治的介入と正義の追求、そして社会的他者との連帯などの主題を対象にして、自らの観点と批判的思惟を示してきたジョン・バージャーの議論について検討した。